群教セ	F08 － 01
	令4.281集
	生徒指導

互いを認め、自己存在感を高める指導の工夫

――ＩＣＴを活用した スモールステップの話合い活動を通して――

特別研修員　粕川　慶大

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

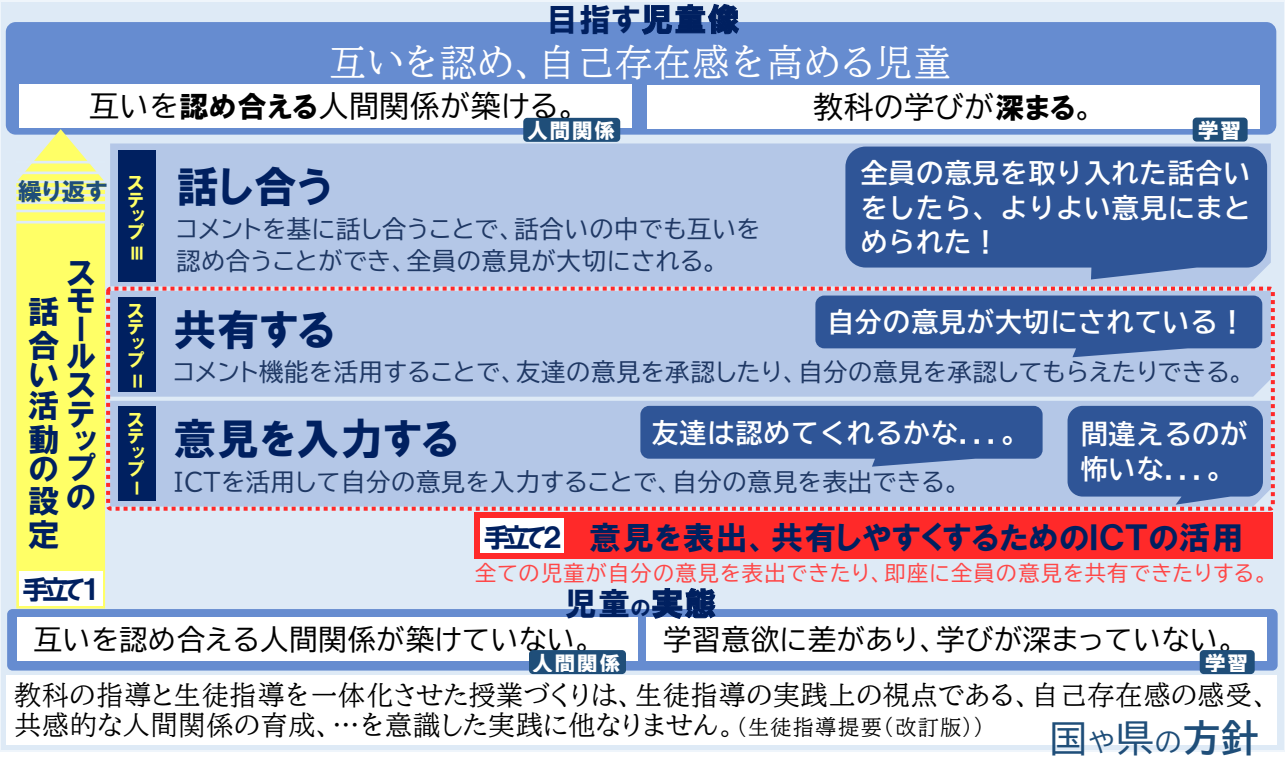
文部科学省の生徒指導提要では、「教科の指導と生徒指導を一体化させた授業づくりは、生徒指導の実践上の視点である、自己存在感の感受、共感的な人間関係の育成、自己決定の場の提供、安全・安心な風土の醸成を意識した実践に他なりません。」と述べられている。このことから、授業において、学習指導と生徒指導を一体化して互いを認め合う工夫を行い、児童が自己存在感を感じられるようにすることは重要であると考える。

研究協力校の児童は、全体としては、前向きに授業に取り組む児童が多く、授業中の発言も多い。しかし、人間関係に不安があり、周りの目を気にして自分の意見を述べられない様子が児童に見られる。また、学習意欲に差があることで、話合い活動では、発言力のある児童の意見が中心になってしまう。全ての児童が安心して自分の考えを発言でき、自己存在感を高める授業の工夫を行うことで、教科の学びが深まり、学力の向上にもつながると考える。

そこで、全て児童が安心して発言し、自己存在感を高めることができるよう、スモールステップの話合い活動を取り入れる。その中で、意見を表出、共有しやすくするためにＩＣＴを活用する。細かな段階を踏んで一人一人の意見を大切にした話合い活動を行い、繰り返していくことで、互いを認めながら自己存在感を高めていくことができると考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

児童が安心して発言し、互いを認め、自己存在感を高めることができるよう、以下のような手立てで実践を行った。

手立て１　スモールステップの話合い活動の設定

以下の３ステップで話合い活動を進める。

ステップⅠ：ＩＣＴを活用して自分の意見を入力する。
⇒自分の意見を表出することができる。

ステップⅡ：コメント機能を活用して、友達の意見のよさや気付きについてコメントを入力する。
⇒友達の意見を承認したり、自分の意見を承認してもらえたりできる。

ステップⅢ：コメントを参考にしながら話し合う。
⇒話合いの中でも互いを認め合うことができ、全員の意見が大切にされる。

手立て２　意見を表出、共有しやすくするためのＩＣＴの活用

手立て１のステップⅠにおいて、Google スライドの自分のページに予想や振り返りを入力する。ステップⅡでは、コメント機能を活用し、その友達の予想や振り返りにコメントを入力する。

それぞれの手立ては、算数の時間に問題の解き方を考えて意見を交流したり、道徳の時間に自分の考えを友達と交流したりする際など、教科を問わず活用することができる。本研究の２回の実践授業は、理科で行い、班で予想を立てる場面と振り返りを行う場面でそれぞれの手立てを取り入れた。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　予想の場面で、友達から自分の意見を認めてもらうこと（手立て１ステップⅡ・手立て２）により、安心感が生まれ、全ての児童が自分の予想を入力することができた。

○　予想の場面で、友達から意見のよさや気付きを認めてもらうだけでなく、疑問を投げ掛けられたり意見の違いを受け入れてもらったりすること（手立て１ステップⅡ・手立て２）により、友達から認められ自己存在感が高まったと考える。

○　自分の考えを直接人に伝えることを苦手としている児童が多かったが、予想や振り返りの場面で、スモールステップの話合い活動を設定したこと（手立て１・２）により、全ての児童が自分の考えを友達に直接述べたり、コメントを直接友達に伝えたりすることができた。

○　振り返りの場面で、自分の振り返りに対して友達からコメントをもらうこと（手立て１ステップⅡ・手立て２）により、友達から認められ、自己存在感が高まったと考える。それが学習意欲へとつながり、「もっとみんなと理解を深めていきたい」「もっと先のことを知りたいと思った」などの記述が多くなった。

○　振り返りの場面で、友達の意見のよさや気付きについてコメントを入力すること（手立て１ステップⅡ・手立て２）により、互いを認め合える人間関係を築くことができたと考える。そのことが、「班のみんなのおかげで予想と計画が立てられ、めあてが達成できた」「疑問に思っていたことが班で話し合ったことで分かるようになった」などの振り返りから分かる。

２　課題

○　予想の場面、スモールステップの話合い活動を設定したこと（手立て１や２）により、以前よりも合意形成に至る班が多くなったが、更に円滑にできるよう、コメントや取組のよさを全体で紹介するなどして互いを認め合う経験を積ませていく必要がある。

○　予想や振り返りの場面で、互いを認め合う人間関係が築けるようになったと考えられるが、更に主体的に取り組めるよう、教師の指示ではなく、児童が自分たちで話し合って認め合いながら次のステップに移れるような工夫した言葉掛けが必要である。

実践例

１　単元名　　「土地のつくりと変化」（第６学年・２学期）

２　本単元について

本単元では土地やその中に含まれている物に着目して、土地のつくりやでき方を多面的に調べる活動を通して、土地のつくりや変化についての理解を図り、観察、実験などに関する技能を身に付けるとともに、主により妥当な考えをつくりだす力や主体的に問題解決しようとする態度を養うことができるようにする。

本単元の目標を達成するためには、全ての児童が自分の意見をもって話し合ったり主体的に取り組んだりする必要がある。しかし、本校では、周りの目を気にして自分の意見を述べられない児童が見られたり、発言力のある児童の意見が中心になってしまったりしている。

そこで、本単元では、集団の中で自分の意見が大切にされ、互いに認め合う学習集団づくりを促進していくことで、教科の目標を達成することにもつながると考え、教科の指導と生徒指導を一体化させた授業づくりを行う。

以上のような考えから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	(1)　土地やその中に含まれている物に着目して、土地のつくりやでき方を多面的に調べる活動を通して、土地のつくりや変化についての理解を図り、観察、実験などに関する技能を身に付けるようにする。（知識及び技能） (2)　土地のつくりと変化について追究する中で、土地のつくりやでき方について、より妥当な考えをつくりだす力を養う。（思考力、判断力、表現力等） (3)　土地のつくりと変化について、主体的に問題解決しようとする態度を養う。（学びに向かう力、人間性等）
評価規準	(1)知識・技能 土地やその中に含まれている物に着目して、土地のつくりやでき方を多面的に調べる活動を通して、土地のつくりや変化について理解するとともに、それらの観察、実験などに関する技能を身に付けている。 (2)思考・判断・表現 土地のつくりと変化について追究する中で、土地のつくりやでき方について、より妥当な考えをつくりだし、表現している。 (3)主体的に学習に取り組む態度 土地のつくりと変化についての事物・現象に進んで関わり、粘り強く、他者と関わりながら問題解決しようとしているとともに、学んだことを学習や生活に生かそうとしている。

過程	時間	主な学習活動
つかむ	第１時	・地面の下の様子を見て気付いたことを話し合う。
追究する	第２時	・縞模様に見える土地の様子をいろいろな方法で調べる。
	第３時	・縞模様に見える土地の様子をいろいろな方法で調べる観察の結果を基に話し合う。
	第４時（本時）	・流れる水の働きと地層のでき方の関係を調べる実験する。
	第５時	・流れる水の働きと地層のでき方の関係を調べる実験の結果を基に話し合う。
	第６時	・火山の働きと地層のでき方の関係を調べる観察をする。
	第７時	・火山の働きと地層のでき方の関係を調べる観察の結果を基に話し合う。
	第８時	・火山活動や地震による土地の変化を、いろいろな方法で調べる。
	第９時	・火山活動や地震による土地の変化を、いろいろな方法で調べる活動の結果を基に話し合う。
	第10時	・私たちの住む土地を調べる。
まとめる	第11時	・土地のつくりと変化について学んだことを学習や生活に生かす。

３　本時及び具体化した手立てについて

本時は全11時間計画の第４時に当たる。本時では流れる水の働きと地層のでき方の関係を調べる実験を通して、地層はどのようにできるのか問題解決できるようにする。

学習問題を解決するために、児童が安心して自分の意見を述べ、それを認められることで自己存在感を高められるよう、以下のように手立てを具現化した。

手立て１　予想、振り返りの場面でのスモールステップの話合い活動の設定

予想の場面では、スモールステップの話合い活動を設定する。まず、全ての児童が予想を述べられるよう、Google スライドに自分の意見を入力する。入力した友達の予想のよさや気付きに対してコメントを入力してそれを認める。そして、その予想やコメントを基に話合い活動をすることで、気付きや疑問を深め、問いに対して適した意見にまとめられるようにする。

振り返りの場面では、スモールステップの相互評価活動を行う。まず、Google スライドに自分の振り返りを入力する。次に、友達の振り返りのよさや気付きに対してコメントを入力する。そして、ステップⅠの意見とⅡのコメントを基に、相互評価を行い、新たな気付きや次時への学習意欲につなげる。

手立て２　意見を表出、共有しやすくするためのＩＣＴの活用

手立て１のステップⅠにおいて、Google スライドの自分のページに予想や振り返りを入力する。ステップⅡでは、コメント機能を活用し、その友達の予想や振り返りにコメントを入力する。

４　授業の実際

(1)　導入

前時までに、地層の観察を行った。そこで、児童が「地層はどのようにできたのか知りたい」と振り返っていたため、本時の学習問題を「地層は、どのようにできるのだろうか」とし、そこから本時のめあてを「地層は、どのようにできるのか調べよう」と設定した。

(2)　展開

まず、学習問題に対して予想を立てた。手立て１のステップⅠとして、個人の予想を端末に入力し、ステップⅡとして、友達の予想のよさや気付きについてコメントを入力した（図１・２）。ステップⅢとして、Ⅰで出た意見やⅡのコメントを基に班の意見をまとめた。スモールステップの話合い活動を設定したことにより、全ての児童が自分の予想を立てることができた。また、その予想のよさや気付きに対して友達からコメントをもらうことで、班で予想を共有する際には、全ての児童が安心して自分の考えを述べることができた。全ての児童が予想を述べられたことで、班の予想が一部の児童のものに偏らず、合意形成に至った（図３）。

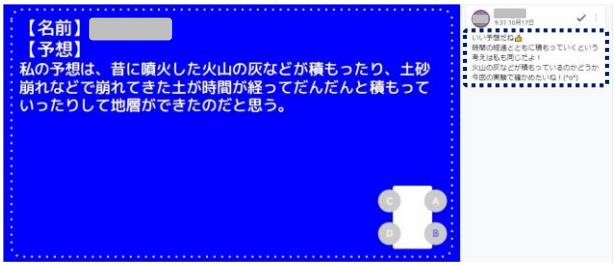


図１　児童の予想（右の枠がコメント）

いい予想だね👍
時間の経過とともに積もっていくという考えは私も同じだよ！
火山の灰などが積もっているのかどうか今回の実験で確かめたいね！(^o^)

図２　友達からのコメント

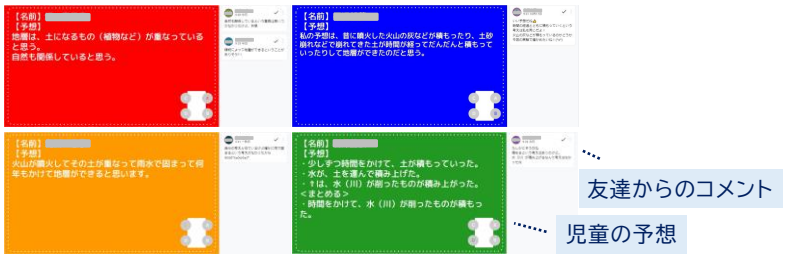


図３　話合いの画面（全員の意見が大切にされる）

図４　互いを認め合いながら進める

予想から計画を立て、実験を行った。本研究の手立てを繰り返し取り入れてから、互いを認め合える関係が築かれ、自己存在感が高まり、主体的に取り組む児童が増えた。また、定期的に班の代表者会議も行い、自治能力も高めてきた。そこで、実験や観察などの進め方は全て班ごとに児童が決めていくこととした。教師は机間支援をしながら児童が困った時など必要に応じて補助に入るなど支援者に徹し、全ての児童に声を掛けることができた。本時も実験方法の基本的な流れのみ伝え、流し込む砂や泥の種類や、流し込み方などは班で工夫させた。児童は、必要があれば、タブレット端末で以前撮影した写真を確認したり、他の班の様子を見に行ったりしていた。どの班も互いを認め合いながら自分たちで実験を進め、気付いたことや結果をまとめることができた（図４）。

(3)　まとめ

次時の考察や結論につながるよう、本時の内容を振り返った。手立て１のステップⅠとして、振り返りを端末に入力し（図７）、ステップⅡとして、友達の振り返りのよさや気付きについてコメントを入力した（図５・６・８）。ステップⅢとして、Ⅱで入力したコメントを直接友達に伝えた（図９）。振り返りに対して友達からコメントをもらい、それが大切にされ、認められることで「意見を言っていいのだ」という自己存在感の高まりにつながったと考える。それが学習意欲へとつながり、「もっとみんなと理解を深めていきたい」などの記述が多くなった。また、「班のみんなのおかげで予想と計画が立てられ、めあてが達成できた」などの振り返りから、互いを認め合える人間関係を築くことにつながったと考えられる。

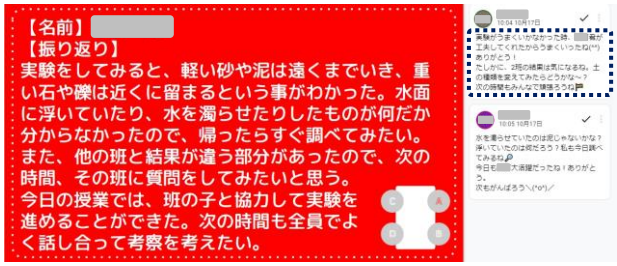


図５　児童の振り返り（右の枠がコメント）

実験がうまくいかなかった時、●●君が工夫してくれたからうまくいったね(^^)ありがとう！
たしかに、2班の結果は気になるね。土の種類を変えてみたらどうかな～？
次の時間もみんなで頑張ろうね

図６　友達からのコメント

図７　振り返りを入力する

図８　コメントを入力する

図９　コメントを直接伝える

５　考察

これまでの話合い活動では、人間関係に不安があることで、周りの目を気にして自分の意見を述べられない児童が多かった。また、学習意欲に差があることで、発言力のある児童の意見が中心になってしまっていた。しかし、本研究の手立てを取り入れたことにより児童に大きな変容が見られた。

手立て１でスモールステップの話合い活動を設定したことにより、全ての児童が自分の意見を入力することができた。また、その意見のよさや気付きに対して友達からコメントをもらい、認めてもらうことで、班で意見をまとめる際には、全ての児童が安心して自分の意見を述べることができた。全体で意見を共有する際も、主体的に意見を述べる児童が大幅に増えた。また、振り返りの内容も年度当初と比べて大きな変容が見られた（図 10・11）。自分と友達の考えを比べ、学びを深めている様子が伺われる。このように、認め合う人間関係が築かれ、教科の学びが深まったことにより、児童の自己存在感が高まっていったと考えられる。

今日の実験結果は予想と一緒だった。
物を燃やすと、二酸化炭素が増えることがわった。

（Google フォーム）

図10　図５の児童の振り返り（４月）

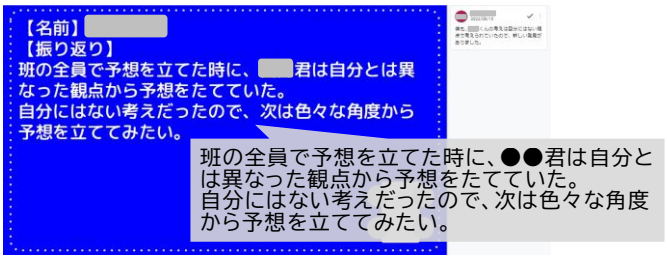


図11　図５の児童の振り返り（６月）

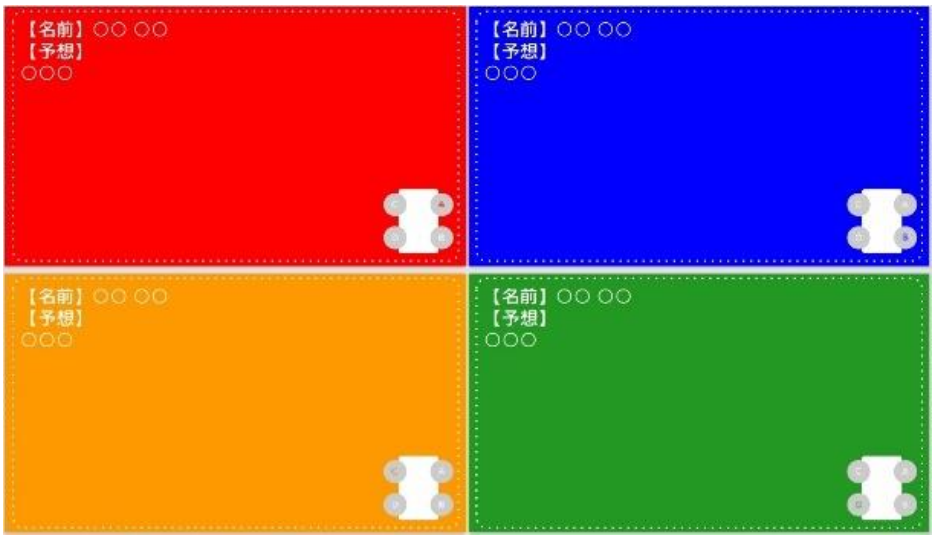
また、手立て２で、意見を表出、共有しやすくするためにＩＣＴを活用したことにより、意見を入力する段階で班のみならず全体で意見を共有することができた。リアルタイムに全ての児童の意見が分かるため、多様な意見に触れたり意見交流が活発になったりして、学びを深めることができた。このことからも、認め合う人間関係が築かれる中で、安心して意見を表出できたと考える。

以上のことから、本研究の手立ては、認め合う人間関係を築き、児童が自己存在感を高めるために有効であったと考える。

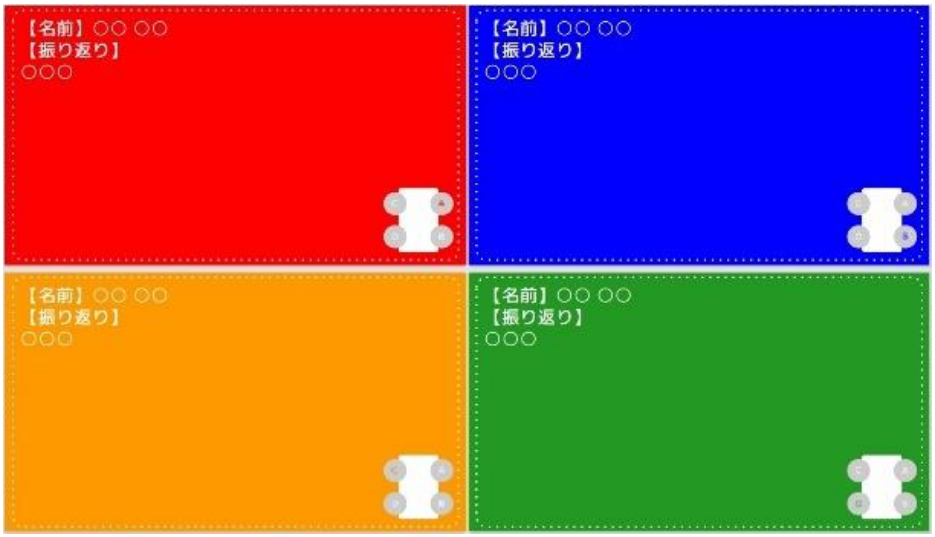
６　資料

Google スライド

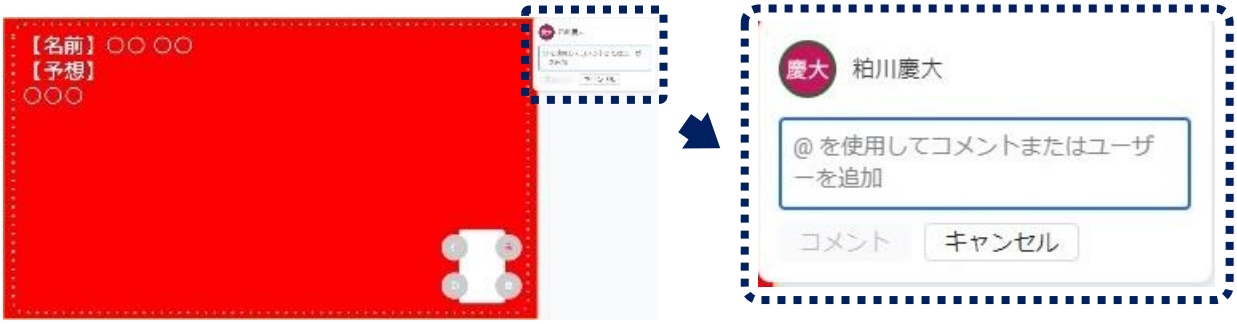
【予想】



【振り返り】



【コメント】



本報告書に掲載されている商品又はサービスなどの名称は、各社の商標又は登録商標です。